

## コンラッドと英語，コンラッドとポーランド語

西 成 彦

### 1. 『闇の奥』と英語

コンラッドの小説にあって、英語は支配的・特権的ではあるが、だからといって圧倒的な言語ではない。達意の言語ではあるが、完成された言語ではない。

たとえば『闇の奥』(1899)は「海の絆」で結ばれた英国人たちを前にしてマーロウが英語で語る話という形式をとっている。彼が語りた奇妙な「ヨーロッパ人」(＝クルツ)との出会いは、その会話が英語によってなされたという決定的な事実によってアクセントを施されている。テムズ河上の英語は、暗黒大陸の心臓部における英語を語る上で、たしかに選ばれた言語なのである。コンゴ河を遡行する船旅の途上、廃屋と化した小屋にマーロウが見出すのも、英語で書かれた『船舶操縦術』なる古ぼけた書物だ。

しかし、『闇の奥』の英語はあくまでも限定付きの言語に留まっている。クルツの最後の言葉——“The horror! The horror!”——は、ブリュッセルに住むらしい彼の許婚者の前で、そのままの英語で復唱されたわけではない。遺言伝達人としてのマーロウは、その“The horror!”を「貴女の名前」であったと、しかもそれをフランス語に置き換えて伝えたのである(あたかも“The horror!”が彼女の名前であったかのようである)。マーロウが「海の男」たちに向かって語った一連のコンゴ体験はあくまでも多言語的な体験である。その多言語の中には当時のベルギー王国領コンゴ(コンゴ自由国)のフランス語や現地語の他に、彼が『船舶操縦術』の余白に元所有者の書き込みとして見出した「暗号」(＝ロシア語)も含まれる。『闇の奥』はマーロウがコンゴの多言語世界に生きた経験の一部を、まずはクルツの許婚者を前にしてフランス語で語り、その舌の根も

乾かないうちに今度は英語でより真実めかして語り直したその顛末を描く小説である。そしてフランス語で語られたバージョンと英語バージョンのあいだに決定的な乖離が存在する。決して英語で語られたバージョンがより真実に近いというのではない。ただ、ひとつだけ言えることは、その乖離を語るための言語として英語が選ばれているということである。コンラッドにとって英語は必然的に特権化された言語ではない。物語を語るにあたって英語を特別あつかいしなければならない根拠を、英語作家コンラッドはそのつど英語に語らせるのである。

### 2. コンラッドと多言語世界

コンラッドを取り巻いた多言語世界といえは、彼がまだユゼフ・テオドル・コンラート・ナウエンチという長い名前を与えられたコジェニョフスキ家の長男であった時代まで、まずは溯る必要がある。

生地である現在のウクライナ領ベルディーチェフは、歴史的に多言語が雑居し、言語と言語が複雑に隣接しあう多言語使用都市であった。ベルディーチェフの都市としての発展は、1569年のポーランド王国とリトアニア大公国の統合(ルブリンの合同)以降である。その後、ポーランド貴族の影響力が強まり、1630年にカルメル派修道院が建設されてからは、多くの巡礼者を集めるようになり、それがポーランド人カトリック教徒の基盤を固める礎石となった。またポーランド貴族による荘園経営に付随する形でユダヤ教徒が徴税他の業務に携わるようになった結果、ベルディーチェフは商業センター・文化センターとしても大きく発展する。人口統計によれば、1789年に約2,000人だった人口が、1860年には51,500人まで膨れあがった。そして、その人口の8割以上をユダヤ教徒が占めたのである。彼らは穀物や食肉

牛、さらには靴や乾物などの製造販売に従事していたという。その後、ポーランド分割（ベルディーチェフは1793年からロシア領）を経て、ポーランド貴族の政治的な影響力は徐々に弱体化し、コジェニョフスキ家（作家コンラッドの祖父や父の世代）は失地回復のための愛国主義的な運動に関わり、捕囚の身ともなったのである。

つまり、ベルディーチェフは現在のウクライナ語に近い言葉を話す先住農民を搾取する形で、16世紀、ポーランド語を話すカトリック貴族が入り込み、そこヘイディッシュ語を日常語とするユダヤ教徒もまた流れこんだ。それがポーランド分割を契機に、ロシア人官憲の監視下に置かれることになり、反ポーランド・反ユダヤ的なウクライナ・ナショナリズムの高揚とともに、19世紀中盤のベルディーチェフは新局面を迎えつつあった。ロシア領ポーランドとキエフをつなぐ鉄道がベルディーチェフを通過することになったことが、商業拠点としてのベルディーチェフを、こんどは製造業中心の都市へと変貌させたのである<sup>1)</sup>。

19世紀後半のベルディーチェフは産業資本主義の時代へと突入しつつあった。コジェニョフスキ家をはじめ、荘園制に依存する傾向の強かったポーランド貴族にとってこの時代が斜陽の始まりであったのは当然といえば当然だった。これがコンラッドが生まれた1857年前後の旧ポーランド王国東部国境地帯をめぐる歴史的概観である。

コンラッドが家庭内で接した言語は、ポーランド貴族の一般的傾向として、ポーランド語とフランス語であったにちがいない。ところが、家から一歩でも外に出たとたんに彼を取り巻いたのは、ロシア語やウクライナ語やイディッシュ語であった。それらはポーランド語やフランス語（や英語）とは違って、キリル文字やヘブライ文字といった「暗号」のようなアルファベットで書かれていた。コンゴに渡って奥地に放置された書物の書き込みに触れるまでもなく、マーロウではなくコンラッドは、「暗号」をすべて解読できたかどうかは別にして、数々の「暗号」に囲まれながら成長した、そんな「ヨーロッパ人」だった。このことは彼のポーランド人としてのオリジンを語る際に、かならずといってよいほど喚起さ

れる原体験の一部である。しかし、この作家の言語的背景を彼の「母語＝想像上の母国語」がポーランド語であったという一点にだけ注目して終わらせてしまうことは誤りだろう。彼はロシア領の旧ポーランド東部国境地帯が歴史的に編み上げてきた言語的な布置の中で、ポーランド語に対して最も父権制的な忠誠心を感じ取る環境の中で育ったにすぎず、彼は多様な異言語体験を原体験として抱えこんだまま、西ヨーロッパに出て、船乗りになった。そして、船は船で、これまた多種多様な言語経験を背景に持つ人間たちの雑居空間だった。船乗り時代のコンラッドは、ただポーランド語を棄てて、フランス語や英語に使用言語を切り替えたのではない。多言語空間としての東部ヨーロッパから、多言語空間としての船や港湾都市、そしてさらには多言語空間としての西洋列強の植民地へと旅と移動を重ねる中、コンラッドは少しずつ作家になっていったのである。彼はたしかに英語作家ではあったが、彼が英語世界を描く作家という枠に一度も納まらなかった理由は、おそらくこの言語遍歴にある。そして、地球上のどこにあらうとも、多言語使用者が周囲の警戒心をあおる存在であるという現実にはコンラッドほど敏感でありつづけた作家も珍しい。

### 3. 『オルメイヤーの狂気』と多言語世界

作家コンラッドがいかに多言語世界の人間関係に世界の縮図を見ていたかを見るのに、コンラッドがジョーゼフ・コンラッドとして名前を売り出す前（というより、その途上で）書かれた小説『オルメイヤーの狂気』（1895）は格好の小説である。

1880年代、ボルネオ島東部（現在のインドネシア領カリマンタン）の奥地を舞台とするこの小説は、オランダ領東インドの錯綜した言語的布置の再現に、ことのほか注意を払って書かれた小説である。主人公のカスパー・オルメイヤーは、バタヴィア（現在のジャカルタ）生まれのオランダ人二世であり、父親はポイテンゾルフ植物園の職員であった。ところが、セレベス島（現在のスラウェシ）の港湾都市マカサル（現在のウジェンバンダン）のオランダ人商人のところで見習期間に、彼のことを見込

んだのは英国人の商人（＝リンガード）であった。かつてスル系の海賊と戦った際に、スル人の少女を救出し、養女として育て始めたリンガードは、養女との縁組を条件に、彼を奥地の商業拠点の代理人に抜擢するのである。オランダ人として育てられたカスパーではあったが、彼は英国人リンガードの厚意と情熱に負け、マレー系（あるいはプロト・マレー系）の言語が支配的であるボルネオの奥地へと生活圏を移すことになる。そこには、マレー系のイスラム教徒がやってくる以前の先住民で、山岳部においやられる傾向にあったダヤク人もしばしば村に姿をあらわしていたし、ブギス人の陸稲耕作者や奴隷として購われてきたシャム人の女性、あるいはスマトラから雇われてきた料理人、華人の麻薬商人、アラブ商人が住み着いている。さらに、そこへバリ島王家の血を引くという青年ダイン（彼はイスラム教徒ではなく仏教徒である）がさまよいこんでくる。

小説は、「カスパー！御飯だよ！」“Kaspar! Makan!”というマレー語から始まる。『オルメイヤーの狂気』は英語で書かれているが、そこにはマレー語の語彙が頻出するのみならず、会話のほとんどはマレー語でなされている。カスパーの妻や、彼女とのあいだに生まれた娘（＝ニナ）は修道学校で教育を受けた経験があり、「ヨーロッパ人の言語」に通じていた。しかし、カスパーとの夫婦関係・親子関係が破綻するにつれ、そういった「ヨーロッパ人の言語」を彼女らはめったに用いなくなる。たとえば、オランダ軍の軍艦が巡航してきたとき、軍人たちは村の長老たちを前にして「鄭重なマレー語で」in choice Malayで挨拶をしたりするのだが、その軍人たちを酒宴に招いたオルメイヤーは、オランダ語での応対をニナに期待する。しかしニナはその期待に背く。マレー系の言語とヨーロッパ系の言語のあいだのコード・スイッチング能力を行使するか拒否するかといったかけひきに、この小説の心理劇的な要素の大きな比重が置かれている。

コンラッドは島の多言語使用に対して、逐一正確な再現を試みているわけではないが、かといってこの現実を覆い隠すことはない。それどころか、カスパーの妻が村に住むもう一人のスル系の男（＝ババラッチ）とスル語で密談する場面や、阿片商人の華

人が片言のマレー語でしか話せないこと、あるいは華人の家に漢字（それこそ「暗号」である）で書かれた紙が垂れ下がっているというような細部に関して、コンラッドは細やかな社会言語学的な関心を払っている。なかでも象徴的なのは、妻にも娘にも見放されたカスパーの最期を描く最終章におけるアラブ商人の役割だ。オランダ人からも島の長老からも見放されたカスパーの遺骸に向かって、アラブ人の親子だけが自分たちの流儀に則ってその冥福を祈る。言うまでもなくコーランの言語を用いてだ。当時、ボルネオのマレー系住民の多くはすでにイスラム教徒であったし、彼らはメッカ巡礼を夢見てさえいたが、コーランの言語を自在に操れるのはアラブ系商人に限られていただろう。かくして「カスパー！御飯！」というマレー語の直接引用から始まった小説は、「慈悲深きアッラーの神の名」the name of Allah! The Merciful! The Compassionate!をささやくアラブ人の吐息とともに終わるのである。

#### 4. 『オルメイヤーの狂気』と英語

非ヨーロッパ語を各所にちりばめながら英語で書かれている小説。それは非英語圏を舞台にした英語文学において決して珍しいものではないだろう。あらゆる植民地文学は、多言語使用の現実を、小説の一言語使用という統合原理の下に整序する<sup>2)</sup>。『オルメイヤーの狂気』とて、この点において特に例外的な英語小説だというわけではない。

しかし、小説の一言語使用という統合原理を通して、しかも多言語使用の現実に読者の目を向けさせる叙述の中で、英語は一方で圧倒的な支配言語としての様相を示しつつ、他方、英語それ自体の異物性をみずから露呈させる。『オルメイヤーの狂気』のクライマックスとも言えるカスパーとニナとの別れの場面のやりとりがそれだ。

駆け落ちに急ごうとするニナが恋人のダインと共にある密会の場に、オルメイヤーがいきなりあらわれ、ダインに向かって銃口を向けるのだが、これに対してダインはマレー語で理路整然と抗議する——「そんなふうにいきなり暗がりから命を狙うなんて、オルメイヤーさん、それじゃあ、僕は猛獣ですか」

‘Am I a wild beast that you should try to kill me suddenly and in the dark, Tuan Almayer?’

ところが、すっかり取り乱してしまっているオルメイヤーは、ひたすら娘に向かって（おそらく英語で）話しかける——「さっさと俺のところにくるんだ。突然気でも狂ったか？たぶらかされでもしたか？お父さんのところにおいで。そしてこんな悪夢は二人して忘れていこうじゃないか」‘come at once. What is this sudden madness? What bewitched you? Come to your father, and together we shall try to forget this horrible nightmare.’

ニナはこのとき微動だにしない。彼女は父の言葉にも英語にも応答できない。しかし、これを見たダインは、次のように入れ知恵する——「お父さんたちの言葉で話してあげなよ（…）お父さんは辛いんだ。君を失うとなったら誰だって辛いものだ。君は僕の真珠だ。お父さんにとってはこれが君の声を聞く最後の機会になるかもしれない。声を聞かせてあげられたら、お父さんはどんなに嬉しいだろうか。どうせその声は一生僕のものになるのだから」‘Speak to him in the language of his people. (...) He is grieving - as who would not grieve at losing thee, my pearl. Speak to him the last words he shall hear spoken by that voice, which must be very sweet to him, but is all my life to me.’——これは、一見オルメイヤーに対する譲歩であるかのようにみえるが、同時にニナに対する愛情表現であり、さらにはオルメイヤーに対する決定的な挑戦でもある。

ところがオルメイヤーは、この挑戦に対して、マレー語で応戦する。オルメイヤーはダインにも聞き取れる言葉で、ダインとの生活には未来がないことを力説するのである。ニナをあいだに挟みながら、オルメイヤーとダインは、結果として、ニナに対する権利をそれぞれに主張しあう格好になる。二人は共にニナに向かって語りかけながら、相互に対峙し、この法廷では最後にニナが裁判官を演じることになるのである。

ところが、しだいに追いつめられ、自分に分が悪いと知ったオルメイヤーは、とうとう英語でニナに話しはじめる——「いったい、お前は母親とあの男から何をされたんだ？どうしてまたあんな野蛮人に

身を捧げようなんてことになったんだ？だって野蛮人じゃないか。あいつとお前のあいだには動かしがたい壁があるじゃないか」‘Tell me, what have they done to you, your mother and that man? What made you give yourself to that savage? For he is a savage. Between him and you there is a barrier that nothing can remove (...)’

しかし、ニナの白人性を強調するために、その恋人や母親（＝オルメイヤーの妻）の野蛮人性を強調すればするほど、ニナはみずからがマレー人である（‘now I am a Malay!’）という確信を強めることになる——「お父さんを愛する気持ちは今も昔も変わりません。だけど、あの人を見殺しにはできないのです。あの人なしで私は生きていけないのですから」‘I love you no less than I did before, but I shall never leave him, for without him I cannot live.’

ここでオルメイヤーは自分たちの会話が英語にスイッチしていることに気づく。——「いまお前の言ったことをあの男が聴いて分かったなら、さぞかし得意なことだろうな」‘If he understood what you have said, he must be highly flattered (...)’

この場面での英語はきわめて特権的だ。オルメイヤーは英語で話すときだけ、ニナを一人占めできる。しかし、ニナは英語ですらダインに対する忠誠を語ってしまうのである。ダインは英語でこそ父との訣別を語らせようと、ニナに向かって英語の使用を促した。ダインとの駆け落ちに成功したニナは、もはや一生英語を用いることはなくなるかもしれない。それこそ、これが彼女がその声をもって英語を語る「最後の言葉」だったかもしれない。

ボルネオの多言語社会を描きながら、西洋語の使用がきわめて限定された文脈の中にゲットー化され、その不朽性そのものが疑われ始める瞬間をこそ、コンラッドは英語によって書きとめる。コンラッドの英語は、グローバル化する英語であると同時に、局地的に「死語」となる危機に瀕している少数言語としてもまた表象される。これは、『闇の奥』において、一方では「抑制の言語」language of restraint<sup>3)</sup>としてマーロウの語りを下から支えている英語が、他方で“The horror! The horror!”へと収束するクルツの「狂気寸前の言語」を語ってしまう自虐的な自

己表象と相通じるものである。

## 5. コンラッドとポーランド語

しかし、オールラウンドな英語が同時に危機に瀕している言語としての英語の末路をも語ってしまうという状況は、ベルギー国王領コンゴであったり、オランダ領東インドであったり、そういった非=英領植民地を描こうとするとき、特に顕著である。たとえば、インドやシンガポールにおいて英語が危機に瀕することは、脱植民地化の時代である今日も考えにくいことである。

コンラッドは、英語が覇権を行使しうる場所を英語小説の舞台とすることに対して、きわめて慎重である。むしろ英語をかならずしも「母語」とするわけではないヨーロッパ人が、その窮地に置かれた状況の中で英語への依存を強め、かといって決して英語がその人間を救済することはないという絶望的状況を描くことにこそ、コンラッドの関心は向けられていたと言うべきかもしれない。

「養子縁組」は、コンラッドにとってきわめて核心に迫る問題である。晩年、コンラッドは“adoption”をめぐって、自分は執筆言語として英語を採用した主体ではなく、むしろこの特殊個性的な言語によって「自分は養子化された側である」it was I who was adopted by the genius of the language（『個人的記録』序文）と語っている。これは、彼が「母語」としてのポーランド語でも、幼少期から憧れ、英語よりも堪能であると最初は認めていたフローベールの言語（＝フランス語）でもなく、英語を小説の言語として選択したことをめぐる述懐として普通は理解されているが、『オルメイヤーの狂気』を読むにあたっては、より一般的な現象としての「言語的な養子縁組」の問題として、問いを開きながら考える必要がある。

バタビアのオランダ人家庭に生まれたカスパーの「母語」はオランダ語以外にありえなかつただろう。仮にそれがマレー語による日常会話能力の習得を妨げない程度であったことは言うまでもないにしてもである。ところがリングードに見込まれたカスパーは、リングードの養女としてヨーロッパ的な教育を

一時的にはあるが授かった女性との結婚に同意したことによって、英語とマレー語の世界に二重に「養子化」されるのである。出自の上ではオランダ人でありながら、島の北部への進出を契機に島全体に対して影響力を及ぼすべく画策し始めた英国の影響力に期待することの大きかったカスパーは、娘とのあいだでさえ、マレー語でないかぎりは英語で話すことが多くなっている。英国人の養女との結婚は、彼から次第にオランダ語を奪っていったのだ。

同じようなことは『闇の奥』のクルツについても言えて、彼の「母親は混血の英国人、父親は混血のフランス人」であり、「学歴的に見ても半分英国人」であるにすぎず、いわば「ヨーロッパ全体が寄り集まって彼を拵えあげていた」のだという。コンラッドは、混血のヨーロッパ人を描くことに病的なまでの執着があり、『オルメイヤーの狂気』に続く『島のならず者』（1897）の主人公ウィレムズもまたアムステルダム生まれのオランダ人だが、オルメイヤーと同じく英国人リングードに拾われ、ポルトガル系の混血女性との結婚を吞まされたあげく、さらにスル系海賊の血を引く少女（＝アイサ）と恋に落ち、いくつもの文化的な養子縁組を生きることになる。出生以前の生物学的な混血化だけではなく、生後の文化的な養子縁組にもまた、コンラッドの関心は向けられていた。つまり、コンラッドはポーランド語を「母語」とする人間が英語で書くにあたって引き受けなければならなかった「養子縁組」の問題を、ヨーロッパの外部である植民地地域を舞台にしながら、より複雑な祖国喪失・母語喪失の問題として描こうとしたのである。

英語世界への養子化とマレー語世界への養子化のいずれにも失敗したオランダ人の物語としての『オルメイヤーの狂気』。彼はそれを英語で書いた。それはある意味では、英国のライバルであったオランダ（『闇の奥』で言えば中央アフリカ地域でのフランスやベルギー）に対する帝国主義的な覇権奪取の物語であったと理解することも可能だ。英語作家コンラッドは、英国の植民地主義を直接非難の対象とすることを巧妙に回避している。

しかし、これは別様にも解釈可能だろう。英語世界への帰属を求めるヨーロッパ人が、植民地世界に

においては英語にも、現地語にも完全には同化し得ず、無国籍化していく。そのような物語を書くにあたって、コンラッドはかならずしも英語で書く必要はなかったはずだ。しかし、オランダ領植民地であれ、ベルギー領植民地であれ、そこに英語の書籍が流れ込み、英語を話す人間が出没する、そういったヨーロッパ人の無国籍化現象の中で英語の占める位置を測定することにこそ、英語作家コンラッドの関心は集中している。

「抑制の言語」としての英語に活路を見出したポーランド人といえば、コンラッドに続いて、後の文化人類学者プロニスワフ・マリノフスキの存在を忘れることはできない。コンラッドについては、その船乗り時代をめぐって、後の回想録が残されているにすぎないが、マリノフスキのトロブリアンド島滞在記は、死後に『日記』として刊行されることになった。この『日記』は基本的にはポーランド語で書かれているが、そこにはトロブリアンドの言語や英語その他が頻繁に登場する。植民地地域における言語体験というのはこのようなものだという好個の例がそこにはある。マリノフスキはこうしたフィールドノートを基に、ほぼ十年近くかけて『西太平洋の航海者』を英語で書くことになるのだが、そこではポーランド語の影はもうどこにも射していない。英語作家マリノフスキがトロブリアンドの未開習俗を客観的に描き取る人類学の著作の中で『日記』は完全に整形され、文明語による未開風俗の記述がそこには奇蹟的に実現している<sup>9)</sup>。

ところが、『オルメイヤーの狂気』のコンラッドは、ボルネオを描くにあたって、あくまでもヨーロッパ人にこそ注目する。オランダ語や英語がオルメイヤーという一人の人間の死とともに、その土地から消える瞬間をこそ、コンラッドは描くのである。そして、この言語の小さな死を描くにあたって、小説の言語としての英語だけが生き延びるのである。一方で英語圏の読者に媚び、他方でオルメイヤーの死を嘲笑うかのようにである。

ここで、もう一人、流浪のポーランド人のことを思い出しておこう。コンラッドが『オルメイヤーの狂気』を書いて間もない頃、流刑囚としてシベリアに送られた後、サハリンでアイヌ文化に魅せられた

ポーランド人がいる。プロニスワフ・ピウスーツキだ。その後、彼はその成果を書き著すことになるが、彼はポーランド語ではなく、ロシア語や英語を使った。極東から環太平洋地域にあらわれたポーランド系知識人の一般的な特徴は、彼らがかならずしもポーランド語に依存したりしなかったという点にある。彼らは「ヨーロッパ系養父・養母の言語」を用いて「非ヨーロッパ系縁組先の文化」を記述することに熱心だった。彼らポーランド人は、オルメイヤーがオランダ語を棄てたように、ポーランド語を切り捨てた。コンラッドはあくまでもこの「母語の切斷」にこだわりつづけた作家である。

英語小説『オルメイヤーの狂気』の中に、オランダ語・マレー語・スル語・中国語に関する仄めかしはあっても、ポーランド語には与えられる場所がない。しかし、オルメイヤーのオランダ語にあたったのが、コンラッドにとってはポーランド語である。しかも、それは国民国家という制度の中で保証された「国語」ではなく、いくつもの言語が群雄割拠する多言語社会の中で、19世紀にはもはや斜陽的位置にあった、ベルディーチェフにおける少数言語としてのポーランド語なのである<sup>5)</sup>。

ウクライナにおけるポーランド語の斜陽とボルネオにおけるオランダ語の落日。この二つを並べてみると、コンラッドとオルメイヤーの類似性がはっきりする。かつては抑圧者の言語であった言語が、新しい抑圧者の言語の登場を前にして、あえなく撤退を迫られる。しかしそれだけではない。コンラッドはその新しい抑圧者の言語でさえが、現地語やあるいはアラブ商人のコーランの言語の前では風前の灯火と化していく。そういった言語状況をまで、彼は自虐的なまでに描こうとする。小説が書かれてから一世紀を経て、ベルディーチェフやボルネオでいま支配的な位置にある言語がウクライナ語やインドネシア語（独立後に制度化されたオランダ領東インドの標準マレー語）であることを思うと、『オルメイヤーの狂気』は預言的な書であったとも言えるだろう。脱植民地化のプロセスの中で、顕在化するヨーロッパ系言語の後退——コンラッドは、ポーランド語もオランダ語も、さらには英語さえもが、旧西洋植民地から消滅する未来——を予測していたの

だ。

グローバリゼーションを担う英語帝国主義の未来を、コンラッドはうすうす予測していたかもしれない。しかし、彼はだから英語で書いたのではない。英語でさえもが断片としてしか根づくことのない場所としてのボルネオ（やコンゴ）を描くことで、彼は西洋近代の有限性をこそ描いたと考えるべきだろう。

## 6. コンラッドと異言語

一時的にであれ、英語の養子となった人間の死を描くために英語を用いること——コンラッドの小説の中でポーランド語（と思しきスラヴ語）を「母語」とする男を描いた唯一の小説『エイミー・フォスター』（1902）は、コンラッドと英語の関係をきわめてわかりやすく示した作品だと言える。エイミーの夫となったヤンコは、一旦は放棄したはずの「母語」を息子のために教育しようとふたたび記憶の底からひきずりだしてくる。ところが、このことがエイミーとの関係を破綻へと向かわせる。二人のあいだの絆は断たれ、とうとう彼は一杯の水を求めようとして、にもかかわらずその一杯の水が得られずに死ぬことになる。高熱にうなされながら、ヤンコは「水をくれ」「Give me water」というような言葉を口にしたという。しかし、妻のエイミーにはそれが聴き取れない。それが英語ではなくポーランド語だったからかもしれない。あるいは、咽喉が涸れ、口がもつれただけかもしれない。とにかくその声は言葉として理解されず、エイミーを脅えさせるだけだった。ヤンコが息子に向かって教育し始めたポーランド語が、彼女を疎外する言語であったのと同じように、「水をくれ」は完全な異言語としてエイミーを恐怖のどん底へと突き落としたのだ。

コンラッドは、英語圏の読者に、英語を用いながら、異言語性の忍び寄る影をつきつけようとする。そして、その異言語の影はつねに死の影とともに表象される。異言語の理解不能性は言語的に翻訳することが不可能だからだ。

(注)

- 1) *Encyclopedia of Ukraine*, vol. I, Univ. of Toronto Press, 1984, p. 204.
- 2) 小説の一言語使用を論じた先行論文として、西成彦「ユダヤ文学の語りの戦略」(『シリーズ言語態⑥ 間文化の言語態』東京大学出版会, 2002所収)を挙げておく。そこではイディッシュ語作家イツホク・パシェヴィス・シンガーのイディッシュ語使用の他に、『異邦人』を書いたアルベール・カミュのフランス語使用にも触れている。植民地の物語を記述する植民地宗主国の言語は、異言語に対する欲望をきわめて屈折した形で表現するばかりか、宗主国の言語の有限性を語ることに、病的な関心を抱くものである。
- 3) ジェームス・クリフォード「文化の窮状」(人文書院, 2003) 132頁——James Clifford: *The Predicament of Culture - Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*, Harvard Univ. Press, 1988, p. 102. クリフォードは、コンラッドとマリノフスキという二人のポーランド人にとって、英語が「抑制（結婚と執筆の）言語」として類似の意味を持ったと論じている。
- 4) 前掲書の第一部第三節「民族誌的な自己形成」は、卓抜なマリノフスキ論であると同時に、コンラッド論でもある。トロブリアンド島の風俗を、ポーランド語を「母語」とする作家が英語で記述した例として『西太平洋の遠洋航海者』を読むという方法は、文化人類学ばかりでなく、文学研究においても活かされるべき方法である。マリノフスキやコンラッドがそうであったように、誰一人として「養子縁組先の言語」以外で書くものはいない。「母語」で書くことなど、誰にもできないことだからである。
- 5) Ian Watt: *Essays on Conrad*, Cambridge Univ. Press, 2000, p. 24.——英国とオランダの間のボルネオ分割と蒸気船の到来がオルメイヤーの運命の及ぼした影響と、ポーランド分割と蒸気機関車の到来がコンラッドに与えた影響について、イアン・ワットはその相似性を指摘している。

## 付記

『オルメイヤーの狂気』の日本語での紹介は、ポーランドのノーベル賞作家ヴワディスワフ・レイモントの大作『農民』の訳者（英語からの重訳）としても知られた加藤朝鳥による『南の幻』（春秋社, 1926）が最初である。加藤はポーランド通であった上に、1920年から約一年はジャワ島で日本語紙『ジャワ日報』の主筆をつとめたこともあり、訳文にもオランダ領東インドで得た知見があちこちで活かされている。しかし、この時期は赤道以北の旧ドイツ領ミクロネシアを日本が領有し、パラオ島コロールに南洋庁が置かれた時代であり、南進文学が盛んになった時期でもあった。したがって、この小説は、南方に働く植民者の苦悩の物語として以上に、熱帯

アジアを席卷する西洋人植民地主義者の没落と道徳的腐敗の物語として読まれた可能性が高い。南洋に朽ち果てる西洋人像を通して、南進する日本人の未来を予見しえた日本人読者がどの程度いたか？これは非常に心もとない。

『オルメイヤーの狂気』はその後も再三翻訳され、コンラッドの作品の中で、かつては最も良く読まれた作品のひとつだった。『蜥蜴の家』（大沢衛訳、弘文堂書房、1940）と『南海の望楼』（加藤寿々子訳、三亜書房、1943）がそれだ（ちなみに中野好夫訳の河出書房版『闇の奥』も1940年である）。アジアから西洋植民地主義列強を駆逐し、日本帝国主義の版図を広げようとした日本の南進政策と、コンラッド熱とは無関係ではなかった。真珠湾攻撃以降の日本軍の南下、及びそれに伴い占領地域に送られた阿部知二ら南方徴用作家たちの旧英領・仏領・オランダ領植民地における執筆活動と、『オルメイヤーの狂気』の翻訳出版ラッシュとは時期がぴったり重なるのである。

本論考は2001年6月から7月にかけて催された立命館国際言語文化研究所主催の連続講座「国民国家と多文化社会第11シリーズ：北の島／南の島」の第五回に講師・コメンテーターとしてお招きした齋藤一・中村和恵・木村一信の三氏とのあいだに交わした対話から数多くの啓発を受けている。連続講座の記録については『立命館言語文化研究』14巻1号を参照いただきたいが、ここでは『オルメイヤーの狂気』の中の女性ニナと、中島敦の短編「マリヤン」

に描かれるパラオ女性との対比について振り返っておく。1941年6月、パラオ南洋庁の「編修書記」に任ぜられた中島は、横浜を発ってパラオに向かい、12月にはサイパン島で日米開戦のニュースを聞く。翌年3月にはもう帰国の途についていた中島だが、「マリヤン」は帰国直後に書かれた連作短編の中のひとつである。ニナは英国人に拾われ、修道院で教育された女性が西洋人と結婚して産み落とした混血女性だが、マリヤンは島の名家の生まれで、半島民・半英国人の養女に出されて英語を教わり、日本統治が始まると、内地への留学を果たして、そこで英文学を学んだという経歴の持ち主だ。彼女らの中で英語をはじめとする帝国の言語が生涯を通じてどのように根を下ろしていったのか？コンラッドにせよ、中島敦にせよ、植民地宗主国の言語で書く男性作家たちは、こうした問いに対して答えを与えようとはしない。ニナやマリヤンのような女性たちがみずから筆を取って人生を振り返るようになるのは、二〇世紀も後半になってからである。日本も含めた列強の帝国主義的進出から不可逆的な文化変容を強いられた太平洋地域における、特に女性の姿をとらえるには、コンラッドから中島敦を経て、今日の島嶼作家まで含めた文学史研究が今後は必要になるだろう。本論ではこの点にまで踏みこむことを断念したが、こういった問題拡張に向けて私のコンラッド研究を見通しの広いものにしてくださった齋藤・中村・木村の各氏に感謝する。